いう公共の空間については、目的を与えてくれる施主が不在のことが多い。これが実は良好な都市空間の創造を阻んでいる主要な原因なのである。

住宅はそれを使用する施主が目的を与えるのであれば、都市はそれを使用する市民が目的を与えるというのは自然の推理である。現状では自分の使用する都市の空間に対して無関心が横行しすぎているようである。より多くの市民が都市の空間に関心をもち、その目的の明示に参加することこそが高密空間にせよ低密空間にせよ、望ましい空間ができていく第1歩である。

なお、カッコ内はシンポジウムの発言者(敬称略)である。

参考文献

1) J. コンドン：異文化間コミュニケーション，サイマル出版会， p. 9, 1980
2) J. カーカップ：日本人と英米人，大修館書店， p. 138, 1973
3) E. ホール：かくれた次元，みすず書房， p. 215, 1970
4) Freedman, J., Heshka, S., and Levy, A.: Population density and pathology-Is there a relationship?, Journal of Experimental Social Psychology, 1975. 11

人と空間に関する意識調査について

鈴木春男 *

Results of Questionnaire on the Concept concerning the Relationship between Man and Space

Haruo SUZUKI*

1．はじめに

今回の公開シンポジウムならびにそれに先立って開かれたワークショップに向けて、実行委員会ではその場ができるだけデータに基づいた実証的な議論の場になることを期待して、3種類の資料を提供した。その第1は、高密社会の現状を、1982年8月の東京を中心に、視覚から実感としてとらえてもらうために用意したスライドである。第2は、既存の量的なデータの中から国際比較が可能なデータを集めたもので、この中には各国主要都市別の空間に関するデータや、10年前との比較のデータ、さらに、わが国の空間特性を示すデータも含まれている。そして第3のものが、ここで紹介する意識調査のデータである。

意識調査は、全体として表われた量としての結果ではなく、社会を動かしている1人1人の人間が、どのような空間的状況に置かれ、そこで何を感じ、どのように行動しているかを明らかにするために行われたものである。また、わが国は狭い国土に数多くの人口をかかえ、極度の高密社会だといわれているが、そのことは、わが国の人々の空間認識や行動にどのような特性となってあらわれているか、といった問題も今回のシンポジウムにおける重要なテーマであり、それの解決への糸口を提供するために、意識調査は、日本を含む4か国の国際比較調査として実施された。後に示すように、日本を除く3か国のデータはサンプル数も必ずしも多くなく、データとしては多少不充分な面はあるが、空間をめぐる国際比較調査としては過去に例のないものであり、わが国の特性を示す貴重なデータであると思う。

2．調査の概要

調査対象者の選出は、機械器具製造業を営むある企業の事業所を海外事業所を含めてまず選別し、それぞれの事業所から対象者個人を選出するという方法をとった。回収サンプルの内訳は下記の通りである。

A．日本国内サンプル　合計573名
　a)　大都市本社勤務のサラリーマン
　b)　大都市近郊の工場勤務のサラリーマン

＊千葉大学助教授（社会学）
Associate Professor, Chiba University
原稿受理　昭和57年11月4日

c) 地方中都市の工場勤務のサラリーマン
d) 地方生産工業都市のサラリーマン

B．アメリカ合衆国内サンプル　59名
アメリカ合衆国ロスアンゼルスの日系企業に勤務するアメリカ人サラリーマン

C．ベルギー国内サンプル　100名
ベルギー国ブラッセルの日系企業に勤務するベルギー人サラリーマン

D．タイ国内サンプル　108名
タイ国バンコクの日系企業に勤務するタイ人サラリーマン

今回の調査はシンポジウムにおける問題提起ないし話題提供のために行われたものであり、仮説検証のための厳密な調査とは異なる、いわばプリテスト的な色彩を帯びたものであるため、サンプリングも多少厳密さに欠け、従って、回収サンプルの構成も国によって異なるという問題点はあるが、各国のおおよその特性はつかめると思う。

調査の方法は配票自記式のいわゆるアンケート法で行ったが、質問票は、まず日本語の質問文を作成し、その中からわが国固有の質問を除く大部分の質問について、アメリカ、ベルギー、タイ各国の言葉に翻訳して作られた。

調査の内容は、人間をめぐる物理的空間や社会的空間に対し、a)その実態は個人別に見てどうなっているのか、b)人々はそれをどのように認識しているのか、c)日本人の空間認識の特質はどこに求められるか、d)高密社会への評価はどうか、などとなっているが、以下にその中から得られた興味深いデータをいくつか紹介してみよう。

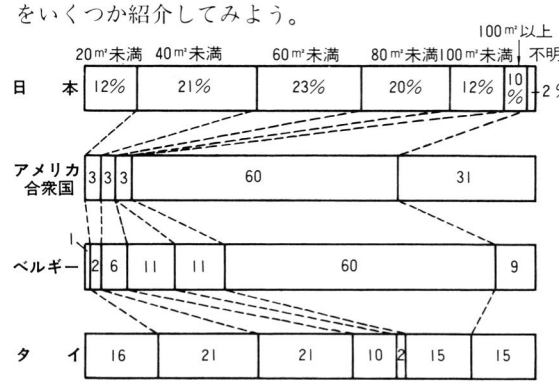

Fig. 1　居住スペースの広さ
Floor space of the house

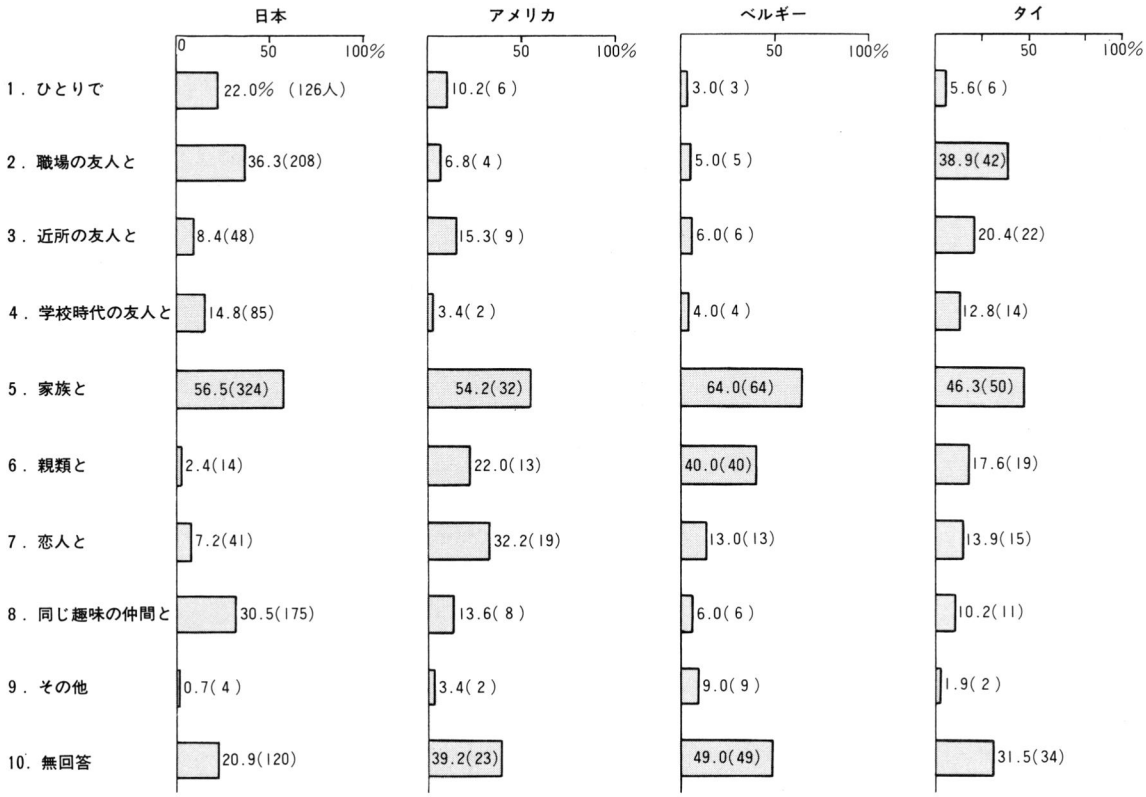

Fig. 2　余暇を共にすごすのは主に誰か？
Who is mainly your companion when you enjoy leisure time?

3．調査結果から

A．居住スペースの広さ

Fig. 1は各個人の家の広さから、玄関、トイレ、風呂などを除いた居住スペースの実態を比較したものであるが、日本、タイとアメリカ、ベルギーの間には非常に大きな格差のあることがわかる。一緒に住んでいる家族の人数の平均は、アメリカ、ベルギーは日本より少なく、タイは日本より多いことを考えると、1人当たりの居住スペースの広さは、アメリカ、ベルギー、日本、タイの順番となるが、ベルギーと日本の格差は非常に大きなものがあり、居住空間において、日本とタイは大変な高密状態であることがわかる。

B．余暇活動の相手

Fig. 2は余暇を楽しむ際、主に誰と楽しむかを図の選択肢の中から2つあげさせた結果であり、各個人にとって、余暇活動の中でどのような社会的空間(集団)が重要な意味をもっているかを見たものである。家族集団が各国とも重要な意味をもっていることは明らかであるが、中でもとくにベルギーは高く、親類も高いことを考えると、血縁的つながりが重視されている社会であることがわかる。また、アメリカもそれに近い傾向が見られるのは興味深い。

日本の場合には、タイと並んで職場が余暇活動の場にまで深い影響を与えていることがまず注目されるところであるが、同じ趣味の仲間というのが他国より高い。それに比べ、親類というのが極端に低く、家族という血縁集団への帰属は高くとも、それ以上の広がりをもつ血縁関係にはほとんど関心がよせられていないことを示している。また、地域集団への関心も低く、そうしたことから、余暇をひとりで過ごす者の比率が他国よりも高くなっている。高密社会の中で働く日本人が、余暇ぐらいは家族水いらず、あるいは自分ひとりで、という心境はわからないでもないが、高密化の中で孤立化が進んでいることも

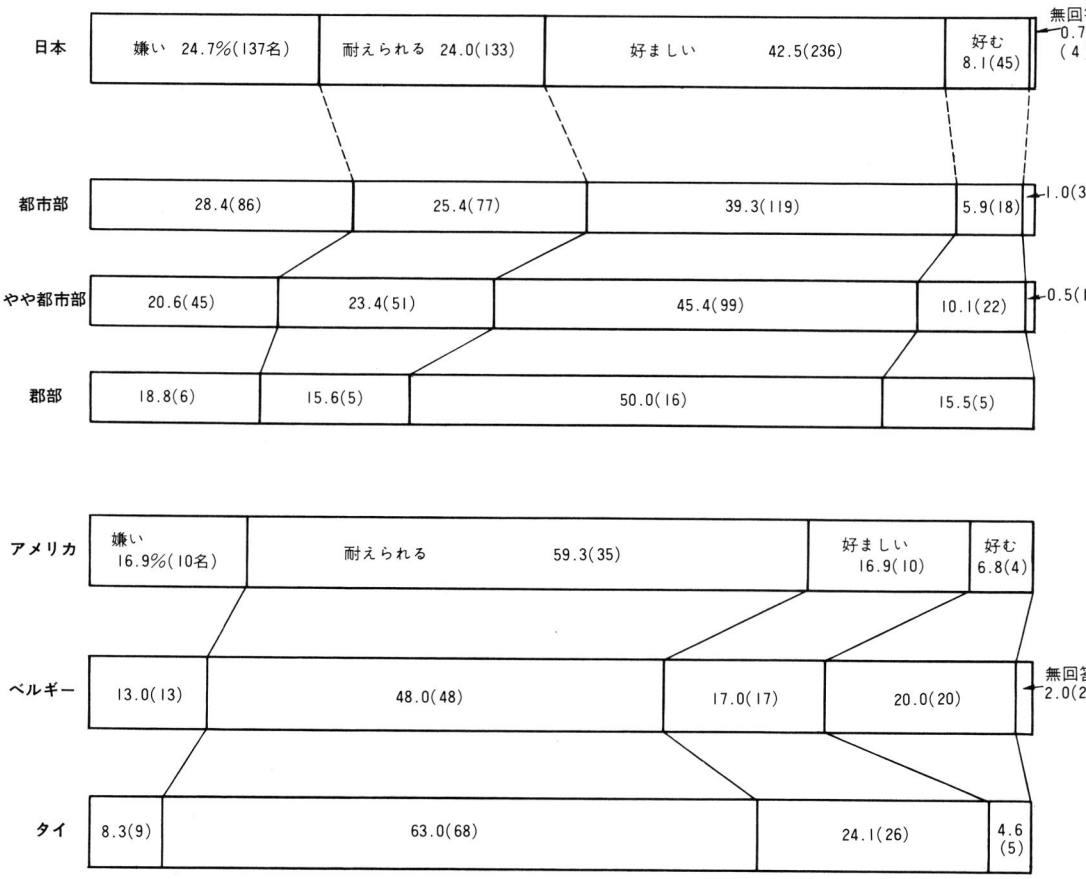

Fig. 3　人混みの中でどう感じますか？(居住地別)
How do you feel when you are in the middle of a crowd?

事実であろう。

C．人との接触を好むか

Fig. 3は、高密社会の中にいる日本人が、人ごみにいること自体をどう感じているかを、各国との比較で見ると同時に、日本の中を都市化の程度で分類して検討したものである。図からも明らかなように、他国に比べ日本人の場合には、「人ごみの中にいることは本質的に嫌いだ」とする者の比率が一方で高いと同時に、「一般に人の多いことの方を好む」という意見は多くはないが、「時と場合によってはむしろ好ましい」という意見を含めると50%以上に達しており、他国に比べ高密を好む傾向を示す人も多いという、両極の傾向が出ているのである。

これは、日本が高密社会であるが故に、人ごみを嫌う傾向が出ると同時に、一方で、日本人が同質的であり、また高密に慣らされてきた結果、時には好

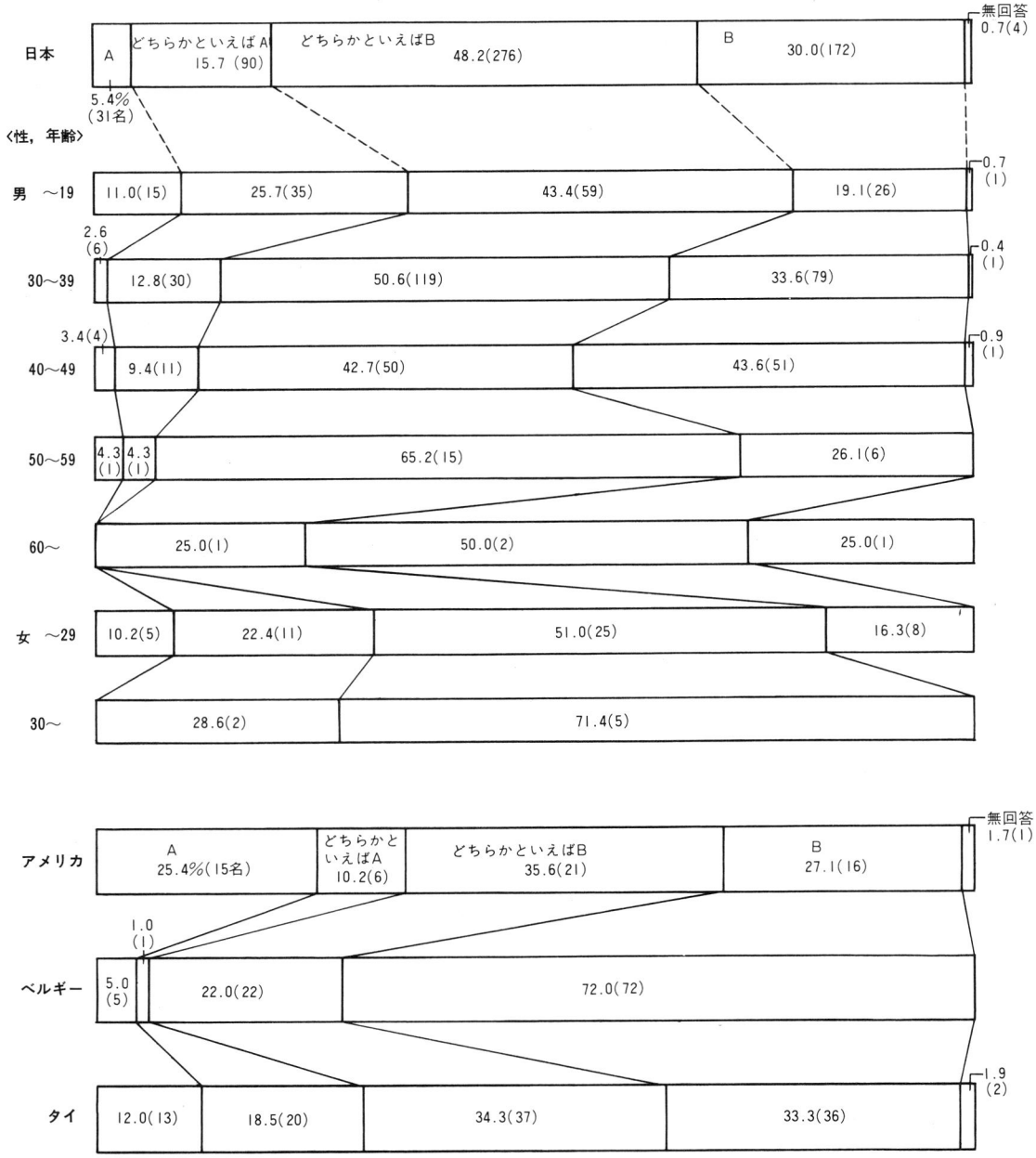

Fig. 4 プライバシーに関しての意見(性・年齢別)
With which opinion do you agree concerning the privacy among your family?

ましいという感覚をもつようになったと見ることができよう。ただし、日本国内を都市化の進行具合で分けて検討してみると、都市部ではあきらかに人との接触を嫌う傾向が出ており、日本の高密化も限界に来ていることが示されているようである。

D．プライバシーに関する意見

Fig. 4は、A：「同じ家に住んでいても個人は独立に存在しているのだから、自分の部屋に鍵をかけるのは当然だ」という意見と、B：「家族の間に秘密があるのはよくないので、玄関には鍵をかけても自分の部屋には鍵をかけるべきではない」という意見を出し、どちらに賛成かを問うことによって、家族内でのプライバシーに対する見解を見たものである。全般的には、各国ともBの意見を支持する傾向が強いが、なかでもベルギーはその傾向が強く、日本がそれに次いでいることがわかる。すなわち、ベルギーならびに日本では、個人が家族の中で秘密をもつなどということは罪悪と考えられ、お互い同士すべてのことを知り合っているのが家族だという認識が強いのである。しかし、これに対する見解は年齢によって大きな差があり、若い層はAを支持する傾向が強いし、また性別で見ると、女性はAの意見を支持する傾向が男性よりも強いようである。

E．都市高密化の問題点

Fig. 5は、現在高密化している都市がどのような問題点をもっているかを見たものである。図は、住宅難以下、現在の高密度の都市の問題点を一つだけ選ばせた結果を示したものであるが、わが国の場合には「事故や災害にもろいこと」を挙げる者が26.5%で一番多く、これは諸外国に比べて極端に多い数字となっている。地震、台風などの自然災害の多いわが国の場合には、納得のいく数字であるような気がする。「住宅難」がそれに次いでいるが、これは日本だけが特に高いというわけではない。「車の渋帯」などはむしろ日本が低くなっているのである。「イライラがつのるなどの精神障害」は、アメリカ、ベルギー、日本が高く、「人間関係の繁雑さ」はタイで高くなっている。このことから、先進国で都市の高密化による精神障害進行の問題がクローズアップされつつあることがわかるのである。

4．おわりに

ここでは調査結果のすべてを報告することはできなかったが、日本の社会特有の傾向があると同時に、先進国ということで共通の傾向、さらにはアジアの国ということで共通している傾向も、他方で存在していることがわかった。こうしたテーマの詳細な分析ならびに本格的調査は、今後、当学会内部にできる「人と空間」をめぐる新しい研究プロジェクトの活動に期待されるところである。

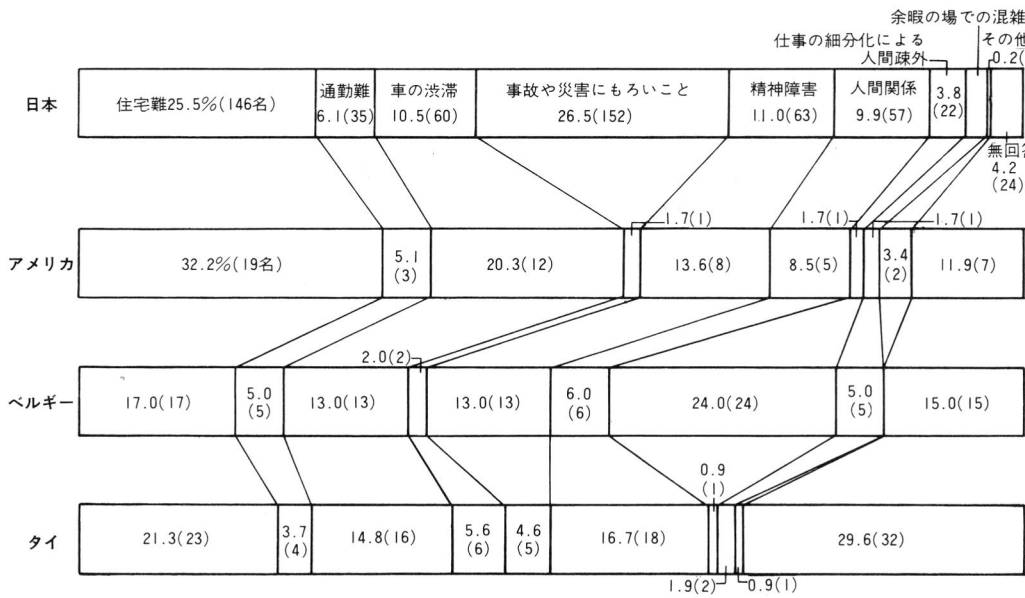

Fig. 5　都市高密化の短所（性・年齢別）
Disadvantageous aspects of the high population density in cities